

町並み散策ばらり in 神奈川

～川崎宿(旧東海道)を歩く～



川崎駅周辺は約7000年前には今より海面が高く海の底でした。近年、幕府が江戸に出来てから川崎は宿場町として繁栄した、日本橋から数えて品川の次の2つ目の宿場町でした。徳川幕府が慶長6年（1601年）東海道を制定後、元和9年（1623年）品川と神奈川宿間が長いので新たに川崎宿が追加されました。現在は国道15号が通っています。江戸初期に多摩川に六郷大橋が架けられていましたが、何度か洪水で流されたようです。その後、渡し舟で江戸から川崎側に渡るようになり渡船は川崎宿の財政を潤し、宿場経営に役立ちました。旧東海道が明治天皇六郷渡御の碑から京急八丁駅まで続きます。東海道いさご通りは、西方は芭蕉の句碑で終わります。川崎宿は東海道を上る人には休息地として、下る人には最後の宿泊地として、また厄除けとして川崎大師（寛文3年：1663年造立）に向かう宿場としても賑わいました。現在は宿場としての役割を終え、東京と横浜の工業、商業の中間地として栄えています。現代のビルの間から、その街道沿いに昔の面影をとこところ見ることが出来ます。

※川崎は東京と横浜の大都市に挟まれた存在感の薄い地域でしたが、近年羽田空港の国際化が進み多摩川を



旧東海道の石標



砂子通り：旧東海道

挟んだ大田区と川崎市はアジアヘッドクォーター特区（大田区）と京浜臨海部ライフイノベーション国際戦略総合特区（川崎区）と位置づけられ、外資企業、医療研究拠点地として変化が期待されます。川崎駅から多摩川近辺は徐々に変化し、益々昔の宿場町の影は薄れていくことが想定されます。



六郷橋の舟のモニュメント



六郷の渡し模型（市民ミュージアム模型）
貞享5年（1688年）の風景

① 現在の六郷橋親柱／

江戸時代の六郷の渡しをイメージして舟のモニュメントが見られる。

② 川崎稲荷神社／

紀州藩主吉宗が8代將軍継承で江戸下向の折にここで休息したと伝えられている。



本陣跡地の近く街道沿いに残っている旅館。

③ 田中本陣跡／

田中休愚は宝永元年に本陣職を継ぐ。



佐藤惣之助生誕の地

④ 一行寺／

1623年頃浄土宗の寺院として開創され火急の場合宿泊所の避難場所にも使われた。境内には川崎宿で寺子屋「玉淵堂」をひらいた大田南畝とも交誼のあった能書家浅井忠良の墓などがある。別名お閻魔様で有名で仮山碑(名園碑)がある。

⑧ 佐藤本陣跡／

田中家を下本陣としたのに対し、佐藤家は上本陣と当時の人は言っていた。詩人、佐藤惣之助(1890～1942年)の生家があった。川崎信用金庫の前に佐藤惣之助歌碑が見られる。

⑨ 小土呂橋跡／

小土呂橋は新川堀の悪水路に架かっていた橋で橋の欄干の親柱が新川通りと砂子通りの交差点に保存されています。



⑤ 宗三寺／

曹洞宗の寺。本尊は釈迦如来。鎌倉時代の僧、玄統が開山。川崎宿で最も古い寺である。境内にはかつて宿場の賑わいを支えた飯盛女(遊女)の供養塔があることでも有名。旅籠には「平旅籠」と「飯盛旅籠」があった。飯盛旅籠は、旅人に給仕をしたり、床を共にしたりする飯盛女(めしもりおんな)を置く旅籠のこと。飯盛女とは年季奉公で近郷から売られてきた女性たちで、そんな女性達の冥福を祈って、大正初期に川崎貸座敷組合によって建てられたものである。

⑥ 砂子の里資料館／

川崎宿を偲ぶ文化施設として開設され浮世絵、錦絵を中心に郷土資料や各種の美術文化を紹介している。絵を守るため中の照明は暗くなっています。

⑦ 稲毛神社／

創立は古代。鎌倉時代に佐々木高綱が社殿を造営。江戸時代は川崎6ヶ村の総鎮守。境内には歴史記念物が多く残されている。市役所通りと国道15号の交差点の稲毛公園には「旧六郷橋親柱」が見られます。



⑩ 芭蕉の句碑／

元禄7年5月11日江戸を立ち、故郷の伊賀へ帰る際に、江戸の門弟達と句を詠んで別れを惜しんだ。